

## 附祝言

謡会の最後尾に謡う小謡はほとんどが「高砂」のキリ、所謂「千秋楽」ですが、その他にも結構いろいろとあることは周知のことです。私の経験で言えば、「千秋楽」に次いで多いのが「猩々」。この付け祝言は最後の謡（素謡であれ、仕舞の地謡であれ）の地頭が指令を出しますが、私の場合「高砂」が8割、「猩々」が2割でしょうか。

「岩船」が過去50年の間に2回ほど。

「猩々」を謡うのは、終了時間が切迫していて少しでも早く終わりたいとき、若しくは、人様のお宅にお呼ばれして謡会を催し、最後のお開きのときに、お祝辞代わりに謡うときに限られています。

先日、さる同好会の席上、付け祝言の小謡にどのようなものがあるのが話題になったとき、さる流友がそれは「あしたはあおいし（明日は蒼いし）」なんですよ」と教えて下さいました。

ご存知の方も多いのですが、私は初めて聞くことでしたので、その方への感謝の気持ちを込めて以下にご紹介しておきます。

あ = 淡路

し = 猩々

た = 高砂

は = 伯楽

あ = 嵐山

お = 老松

い = 岩船

し = 代主

でも、「伯楽」って、観世流にはないではないかと・・・。乱曲にでもあるのか・・・。

結局、よく分りませんでした。（お分かりの方、ご教示ください）

## 生み字（１）

先日、さる同好会のあとの飲み会で先輩と話をした時のことです。

私が、「かなりの経験を積んだ方でも、何か謡に物足りなさを感じるのには、いろいろな原因（要素）があると思いますが、生み字をきちんと意識して謡っているかどうか、大きいのではないかと思うのですが・・・」と切り出しましたら、その方は、即座に「そうですよ！ 謡は勿論ですが、すべからく日本の音曲は生み字で成り立っているようなものです」とお答えになりました。

そう言えば、長唄、常磐津、都都逸は勿論のこと、演歌でも生み字が幅を利かせています。演歌を乗り越えたと、私が賛美している井上陽水の歌も生み字を抜きにして考えられません。

人によって生み字の苦手な方がいます。実は、沢山おられます。そのような人にとって、謡に必要な生み字の発声をどうして出すか、それも、生み字を大きく出すのではなくて、観世流の謡に必要な短い生み字をどうしたらだせるかが課題でしょう。

私は先ず「生み字」を意識することが第一だと思います。ゴマ点が右下がりになっている処は概ね生み字を意識しなくてはならない個所ですから、ここを確りチェックすることでしょう。

次は、短い生み字の出し方ですが、「何々しちゃ（ア）った・・・」の、小さなアが、短い生み字に相当します。声を出してこれを繰り返してみたら、きっと短い生み字が発音できるようになると思います。

## アマチュアによる舞囃子

アマチュアの同好会で舞囃子が披露されることは、それほど多くはないのですが、先月（平成27年6月）は、私の知る限りでも、横浜能楽堂で開催された会で2番、東京渋谷のセルリアンタワー能舞台で3番の舞囃子が舞われました。

私のところにも、この二つの会の番組が送られてきていて、できれば拝見したいと思っていましたが、仕事の関係で時間のやりくりが出来ませんでした。

両会ともに、白謡会の会員の何人かが観に行かれましたが、いずれも素晴らしい出来栄であったと聞きました。結構なことです。

舞囃子の場合、仕舞と異なる点は、お囃子（太鼓、大鼓、小鼓、笛）の存在が不可欠であること、また、地謡が拍子謡になることでしょう。

白謡会の会員の中でも、多くの方がプロに就いて、お囃子を習ったり、拍子謡を習ったりしていますが、この分野では、折角習い事で上達しても、それを舞台の場で実践するチャンスは、素謡や仕舞に比べるとはるかに少ないのが実情です。

ですから、アマチュアの会での舞囃子の上演は、舞う人だけでなく、それ以上に、お囃子の担当や地謡の人たちにとっても、低廉で気軽に自分の日ごろの稽古の成果を発表できる機会となります。

勿論、舞う人にとっても、仕舞と異なり、舞囃子を舞える機会が得られるのは滅多にないことであり、且つ、本格的な能の世界に更に一步近づけるという意味で、とても有意義なことに違いありません。

ところが、ごく一部のプロ能楽師は、アマチュアが舞囃子を公共の場で演じることに否定的な考えを持っていると仄聞しました。

これは、アマチュアから見ると、とんでもないことです。

アマチュアとして、お金を支払い、自らも努力して会得した技を、能楽を知っている人、知りたい人に披露したいと考えるのは当然の理であり、これを誰も妨げることは出来ません。

プロは勿論のことですが、アマチュアの側でも精一杯、「能楽」の普及に努めなくてはならないご時世になっているから、なおさらと言えます。